

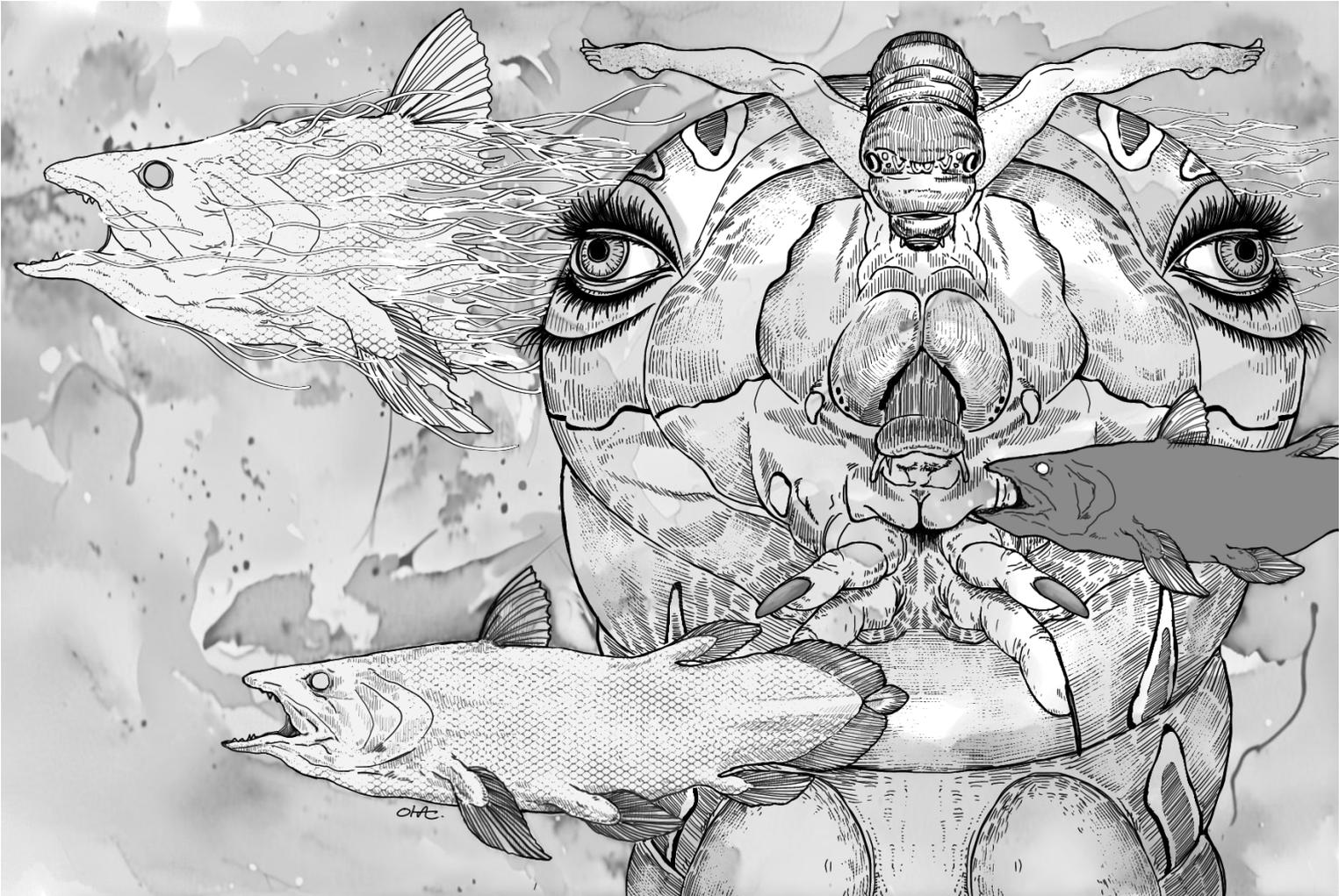
KSKQ

イマージュ

2025年7月

1991年9月3日 第三種郵便物承認

毎月(1・2・3・5・6・8の日)発行



イラスト/OKA

国際芸術祭あいち 2025 招聘公演

# 態変 『BRAIN (ブレイン)』

作・演出・芸術監督=金満里

システムアーキテクト=時里充

音楽=ボロット・バイルシェフ (楽曲提供)

※巻上公一プロデュース作品「チュルク・カバイ」より

\_underline (楽曲提供)

愛知県芸術劇場 小ホール

2025年

9月26日 (金) 18:30

9月27日 (土) 18:30

9月28日 (日) 14:00

## 世界初演『BRAIN (ブレイン)』を引っ提げて、

### 態変は、国際芸術祭「あいち2025」に、

### しなやかに楽しんで殴り込む

金満里

この9月、光栄にも国際芸術祭「あいち2025」で舞台を務めさせていただくことにあいなった。

私が光栄と言う中身を伝えたい。

5月の「あいち2025」記者発表で、6年前の「表現の不自由展」中断\*をめぐって「今年の開催内容もかなり政治的とみなされ、反感を持つ一部からの妨害への懸念はないのか」という質問があった。フール・アル・カシミ芸術監督は悠然と「芸術祭がその趣旨で妨害を受けることは、世界中で珍しいことではない。そういうときは話し合って理解されることに、自分の責任で説明を尽くしたい」と答えた。

\*注釈 当時「あいちトリエンナーレ」と呼ばれていたこの芸術祭の中の企画「表現の不自由展」に出展された「平和の少女像」を日本軍性奴隷問題に関連付けて右翼勢力が問題視し圧力をかけ企画自体の中断に追い込んだ。

私の「光栄」の意味はここにある。この国際芸術祭で態変が大きな一石となる意味について、もう少し聞いて欲しい。

戦争や戦時性奴隷の問題の底を掘れば、健全な身体が大前提で、それを底支えする五体満足優生思想が根幹に居座っている。健全者の眼差しから強者が創り上げてきた文化は無自覚な健全者の常識を克服できない。そこから最も遠くにあるからこそ態変が培って来れたどこにも当て嵌まらぬ異質な表現芸術を、この場に投じられるチャンスが来たということ。これは今、最もラディカルでレヴォリュショナリーな過が巻き上がる舞台を与えられたことなのだ。

ここからが本題。

## 極私的人類へのエール、『BRAIN (ブレイン)』

一人の身体に約37兆個といわれる細胞。

私は、その一つずつの細胞に、人格がある、というイメージを持つのです。細胞は互いに、一瞬の判断を隣と伝達しあうような対等な会話で動きを選びとったり危険を回避したりして、それが身体全体の活動、一人の人間の日々の暮らしを成立させている。それは決して、脳だけに判断の権限があつて身体はそこからの司令をただ受け取るだけという、脳が主で身体が従の関係、ではないという実感があります。

態変身体表現は、脳に管理されない身体自身の身体表現が立ち現れているからこそ、命が顕になる奇跡的な瞬間を舞台にすることができました。これは通常の価値とは逆さまの、身体が先で脳⇨頭はあとから付いてくる、という価値を創ってきたのです。

しかし、細胞は対等だというのなら、脳にある細胞も対等なのであつて、態変身体で今度は脳も引き上げようではないかという、言うなれば、態変の新たなフェーズへ突入させる、ズバリ！『BRAIN (ブレイン)』⇨脳、なのです。

世界は戦の論理・強者の論理でより弱い者を打ち負かし、より弱い子供や障害者が殺される荒廃した絵図に、身体を使っています。

細胞の集まりが一人の人間を形成させるときに、細胞人格同士の自律し自認し伝え合う連携があるように、態変は今、身体と脳の主従関係を克服するだけでなくバラバラにせず一つに合致させようとしている。そうして、何びともいろんな形を持ち寄って、殺さない殺させない、という世にしようという思いを、『BRAIN (ブレイン)』創造に込めるのです。

海で発生した微細な生命がやがて脳を持ち魚になり、ボテツと不効率な海の落ちこぼれイクチオステガが追いやられ仕方無しに恐る恐る暗黒の陸に上がったのが今の人類に続く、という生命の足掻きを題材にします。ここでは未来につながる生命像を「海の落ちこぼれ」⇨陸の「芋虫集団」に見ます。

そしてAIを人類の未来に投げかけられた問題と見るのですが、生命の外部で作られた人工知能との出会い方にまよいます。AIが、自然を壊すものになるか、海を孕む骨\*のように内に取り込み人類の必要で足らない部分の養分となるのか、は人類の叡智にかかっている、と思います。

今回のチャレンジはワクワクしかありません。

\*注釈 私たちの骨には海の成分が全部閉じ込められていて、私たちは体に海を持っている。体に海の成分が不足すると骨を溶かして補充をするのだそうです。

# インタビュー 国際芸術祭「あいち」 の魅力に迫る！

国際芸術祭「あいち2025」にてパフォーミングアーツのキュレーターを務める中村茜さんに、芸術祭について、態変への期待についてお話をいただきました。

## 国際芸術祭「あいち」とは

——国際芸術祭「あいち」はどんな特徴を持った芸術祭で、何がウリであるか、大いに売り込んでください。

**中村** 現代美術だけでなく、パフォーミングアーツなどを含めた複合型芸術祭で、国内最大規模の国際芸術祭の一つです。

愛知県が「百年続ける芸術祭」と銘打って立ち上げた芸術祭と聞いています。そのような長期的なビジョンには愛知県の本気度がうかがえます。

また、名古屋の栄にある複合文化施設・愛知芸術文化センターを中心にしながらも、愛知県のいろいろな地域に焦点を当てています。今年は、一〇〇〇年以上続くやきもの産地・瀬戸の町を舞台にしたサイトスペシフィックな作品などを含め、美術館、劇場、まちなかで芸術祭を繰り広げます。陶磁器の原料となる粘土を製造する工場を活用した展示や、陶磁美術館の広大な広場を活用したサウンドインスタレーション、アーティストグループが運営するレストラ

ンや、オープニングにはパレスチナからミュージシャンを招聘したクラブイベントも開催します。このパレスチナの作品は、先日まで現地で撮影を行っており、消されていく文化に焦点を当てたもので、新作のインスタレーションもクラブで展開します。

## 「あいち2025」の芸術監督フル・アル・カシミとコンセプトについて

——フル・アル・カシミさんはアラブ首長国連邦でしたっけ、アラブ、ムスリムの世界でしかも女性ということで、少しとんがったセレクトやなっている感じがしたんですけど。どういう経路でこの方を見つけてきはったんですか。

**中村** 私が見つけたんではないんですが（笑）。私の理解では、世界の国際芸術祭の潮流として、いわゆる西洋偏重、白人男性中心の価値観に対して、ポストコロナアルな視点でのキュレーションが注目を集めているので、その流れをくんだ選出だと思えます。日本の芸術シーンに新たな局面を切り開く、見事なセレクションだと思っています。

フルさんは、昨年イギリスの現代美術雑誌『Art Review』で、世界で一番グローバルにアート界で活躍したキュレーターとしても選ばれました。

——フルさんはかなり意欲的にぶち上げてはると思いますが、その辺の紹介をお願いしますか。

**中村** まずフルさんが立てた「灰と薔薇のあいま」というテーマですけど、これは現代アラブを代表する詩人・アドニス（Adonis）の詩の一節です。戦争の惨禍

を目のあたりにしたアドニスが、戦争による環境破壊を嘆きながらも、同時に破壊の先に希望も見いだしたいと。私達が今生きているこの世界では人間と環境の間に破壊されていくものたちの色んな深刻な問題があつて、その溝はどんどん深まる一方だけれども、こうした複雑に絡み合う人間と環境の関係というものが、国家と領土とか民族といった人間中心の視点だけではなく、地質学的な時間軸から考察することで、人間と自然が二項対立的なものではなく、その関係性から新たな共同体や人間性が生まれてくるような道を探っていきます。

私は、パフォーミングアーツのプログラムに携わり、このテーマから掘り起こして、三つのポイントを重視しました。

第一に、人間と自然の関係がどうなっているのか。人間中心で自然を支配していく関係ではなくて、人間の生活や共同体が自然と共にある関係というのがどういふものなのかということ、その土地固有の文化とか自然や環境と人間の繋がりとイふものをもう一回捉え直す、問い直す必要があるのではないかと思います。

第二が、戦争です。歴史や記憶の中にある戦争と現在進行形の戦争ということを踏まえて、パレスチナやウクライナの今の現状にも思いをはせつつ、街や生活を荒廃させ、大きな傷を与えている戦争というものの、この事実から私達は何を見出すことができるのかという点です。

第三が、資源や領土を巡る世界的な権力構造。連綿と続く格差、搾取、差別について、さらに植民地や帝国主義の歴史から続くポストコロニアリズム時代の力の関係について問うこと。

この三つのポイントを重視してパフォーミングアーツのセレクションを行っています。これら三つ

の観点から、人間性の回復、既存の価値観で見えてこなかったような物語や身体性を感じさせる作品をプログラムしています。

フルさんの提示したポストコロナリズムに対しての強い意識を持ったコンセプトは、なかなか日本人には書けないものです。日本人はポストコロナリズム時代を意識しないように教育されていると思うので。でも、単一ではない日本の姿をちゃんと見つめる時が来たと思っています。日本はアジアに対して植民地化したけれども、この歴史についてきちんと学んでいないために、日本人が考える日本と、帝国主義の被害を受けた人たちが捉える日本は大きく違う。そのギャップにもすごい課題を感じてきた中で、いかにフルさんのコンセプトに向きあい、日本人として立ち向かえるのか、ということは、試されました。

また、その土地固有の文化とか先住民の表現とか、西洋的に歴史化されてこなかった表現に対して、いかに私達が理解するというか、向き合っていけるのか、ということが今回とても重要なテーマだと思っています。

——今回のプログラムには、もう見事にヨーロッパのグループは出てないですね。もうラインナップが見事なと思って。日本からの参加も日本の多様性というのをこっぴど打ち出すかっていう、お見事やと思いました。

中村 ありがとうございます。そこも今年の魅力の一つですね。

## 態変への期待

——最後に、なんで態変に目をつけて招聘してくださったか、態変に何を期待しているのかということ。

中村 いくつかあるんですけど、まずその自然と人間の関係を考えるとフルさんの一番大きなコンセプトがあつて。態変が捉える身体っていうのは、頭脳で操る身体以前の、身体そのものを自然の一部として捉えていくアプローチ。自然そのものとして身体を切り取ったときに、いかに私達は身体に対してその価値を見出せるのかっていうことを聞きたい、というのが一つ。

次に、金さんのバックグラウンドとして間性あいだみたいなことです。日本人と韓国人の間だったりとか、障害者の中でも、脳性麻痺みたいに言語障害があるキツイ障害との間、そして施設と自宅の両方での暮らしの間に、金さんが培われた感性や価値観、社会への抵抗力がありますよね。

この芸術祭は、テーマにもあるように、灰（終末論）と薔薇（楽観論）のような極端な二項対立ではなく、そのどちらでもない「あいだ」から世界を解きほぐそうという試みです。金さんが置かれた複数の間性から見える世界観は、まさにその試みを体現するものになるはずですよ。

そして、障害のある身体の様相が、これまで見えない環境にあると思います。昨今は、多様性の時代と言われて、より見えるようにはなっていますが、芸術の中でも、いかに障害のある身体を捉えていくのかということに国際芸術祭の舞台で問いを立て

てみたいと思いました。

——ズバリ、態変に何を期待しますか。

中村 観客にとって新しい目覚めになるような、身体性や自分の価値観を、改めて捉え直すような作用が起こることを期待しています。そして、金さんにとっても、ここで発表する作品が長いキャリアの中で節目になるような、芸術家としての歩みの重要な布石となる作品になるといいなと思っています。



国際芸術祭「あいち2025」チラシ表紙

# インタビュ― A Iと芸術 時里充×金満里

『BRAIN(ブレイン)』において態度の身体と対峙するA Iの世界をまさにA Iを用いたアート(システム・アーキテクト)で表現してくださる時里充さんと金満里の対談を一部抜粋でここに披露します。A Iの可能性と危険性、言語や身体をめぐって、などエキサイティングな対談の全貌は8月発刊予定の「異文化の交差点・イマージュ」92号をお楽しみに！

(前略)

**時里** A Iには体がないじゃないですか。体がないというのがすごい大きい差ですよ。

**金** でも、違うところから来るものをA Iに埋め込んで別の価値観でもっと学習させれば、おもしろいものができるんじゃない？

**時里** できそうですね。でも結局その言葉を健常者の言葉に割り当てるんです。今の言葉を生成するA Iは、要は今まで大量に喋られてきた言葉、インターネット上にある言葉でA I大規模言語モデルを作った成り立っている。それは身体なしで話しているわけです。けれど、金さんのお話を聞いて、言葉って体がないと出てこないものかなっていう感じがすごく今してきて。

**金** 今回は、身体に価値を置いた態度の表現に脳も

仲間に入れてあげたいって感じやねんか。それを身体性として、言語・知識の部分ではなく体から来るそのつながりとしてやりたい。そこからポーンと飛んでA Iに行くんだけど、私も障害者の仲間たちもA Iには否定的な人が多い。役立ててる人もいるけど、A Iが学習能力を競っているかぎり障害者を排除する方に行くんじゃないか。役立たずってされる障害者がそれを自分の手足のように使いながら自分を生かすって、矛盾してるんじゃない。

**時里** 矛盾してますね確かに。でも逆に言うと、障害者は絶対模倣されない、絶対真似されないなと思えました。人それぞれに、すごく色んなパターンのある色んな障害があると思いますが、それはA Iに模倣されない。態度の稽古を見てても人それぞれのやり方、パターンがあるから。その人なりの何か正解っていうか、そのルールを作るのに、その人ごとに作らないといけないじゃないですか。これは大変そうだけど、でもそれはもしかしたら希望かもしれない。希望というか面白いところかもしれない。

**金** 大量生産できない、もう個別性そのものでもうね。

**時里** でも逆に言うと、A Iを自分用に作ることもできるところまで来ています。それは企業とか大きな組織に作られたものではなくて、一人ひとりが自分で小さいA Iみたいなものを育てていくことが今はもう結構できてきているから、面白くなるかもしれない。

僕が思ってたのは、そのようなA Iが、もう一つの共同作業の相手、一緒に作業できる人みたいな感じ

じになると楽しいのかなと。僕がA Iと一緒に作品を創り始めた一番最初の出発点はそんな感じなんです。

(中略)

**金** 去年8月からずっとオンラインで時里さんと一緒に何が創れるかを練ってきたけど、最初にね、態度哲学、地面に最もひっついてる者がどういう価値観を持って、そこから世の中の見方をどういうふうひっくり返していくかという話をしたよね。

**時里** その話は僕はすごく楽しくて。そして、なんか今まで面白いと思ってたものがすごく怪しいし危ういなって思うようになってきた。コンピュータ使ってると思うのは、A Iが出してきてくれた答を面白いかどうかを判断することが、すごく頭打ちだなと。なぜかって言うと、自分が答えを導き出すためのプロセスが全て抜け落ちてる。プロセスはコンピュータの中にあってそれは僕らには見えない。でも判断するのって結局人間じゃないですか。変なもの、観たこと聴いたことがないものに出会いたいんだけど、それが逸脱しすぎると理解できなくなる。でも普通にしすぎるとつまらない。面白さを判断できるのはある種の経験があるからなんでしょうけど。そのあたりがね：

自分が今何を面白いと思えるのかみたいなことがね、金さんと話して態度の稽古を観て、僕はもうなんかすごい色んなことを得てしまって、何を返したらいいんだろうか。A Iで金さんに太刀打ちできるのかな。何を投げ込んででもヒットを打たれちゃう気がする。でもツールストライクぐらい取りたいなああっていう、9月までもう必死ですね。

## 脳と私の身体

井尻和美

脳からの指令通りに動かない私の身体。

また脳での静止を無視して、身体は勝手に動いてしまう。

具体的には、脳では普通の動きをイメージしているのだが、何かをする時、緊張で身体に余計な力が入り、暴れているように見えたりする。

必死になると、口が開き、舌が出る。転けないように意識すると、足が前に出なくなる。

子育て中、娘を寝かし付けようと思い、トントンとリズムカルに？手を動かしている時、突然、力が入り、逆に起こしてしまつた事など。

このような自分の脳内イメージとは違う動きは、健常者には起こらないCP（脳性麻痺）特有のもので「CPの脳と身体」だと思う。

それに言語障害のある私の言葉は、AIには全く通じない。

おそらく障害者（CP）の動きと言葉を、AIにプログラミングするのは不可能かと…。

でも、この厄介な「CP脳の身体」は唯一無二のもので、態度の表現として活かされている。

そして今回の作品「BRAN」で、AIと態度の身体とのコラボが、演者の私も楽しみである。

## 脳と伝わる生活&amp;麻痺

渡辺綾乃

今日は何をしようかな？と考えているが、それはいつも、脳では…だが体はそうじゃない。その日によって違う！方向が彷徨ったりする。伝達もうまくいかない。日々スローモーションで体は動く。止まる時もある…脳は、逆に追いつかないくらい回つていて激しくなっているのだ。

足もヒラメみたいな、力が入りにくい柔らかいウラ。

本当は思うままに動きたい。

だが動きの一つ一つがパーツでそれが脳でもある。つながって固まつたらどん

なふうになっていくのだろうか…

私の脳と体は、様々な想いを持った生物が居る謎の世界みたいで、どうやっていくのか…一日をたどるストーリー。

あつというまに終わる日々の中で、自分たちの脳はどうなっている？今後とは？

そういうことも想像でき、ワクワク、ヒヤヒヤ、ドキドキ…そういう気持ちになつて観てもらえたら嬉しいな。

## 今日、ぼくは…

下村雅哉

『今日、ぼくは…』

あとが、出てこない。

手の震えで書くことができない。いや、文が浮かばないから、書くことができないのが正しいと思う。

えんぴつ握って、空白の行間を見る。また見る。テレビが気になる。宿題の日

記を書くのが、大の苦手だった。脳が崩れ行く音が、毎日のように聞こえていた。

頭のとっぺんから足の爪まで、振り絞って書くこうとしていたあのころ、好きなテレビを見るために必死の頑張り。…果たして、自分の頭のとっぺんは、自分の目で、何も使わずに、見えるのだろうか？

自分の目で、自分の頭のとっぺんを見るのは、不可能。長さとしてはわずかなのに。頭のとっぺんから、目の間には『脳』があり、そこに大量のデータを、内から、外から吸収している。そして、指令したり、発信したりする。

ただ、ぼくの脳は、異変かもしれない。学生時代、ある教師から『お前の答案の文字わからぬ時、俺が気分良かったら、正解にしているからな』とみんなの前で高笑いする。（なんていうことや）科学が進み、一つのボタンをタッチすると、次の言葉が出てくる。また次のボタンにタッチすると、知らないあの時のことが一覽で出てくる。夕食のメニューから、遠い国のことまで。

澄んだ空気の中で、空を見上げると、右には一番星が。左には太陽が沈む。

『今日、ぼくは…』  
震えながらボタンを押すこともなく、今日は書けそう。

舞台のど真ん中で 震えて何を描くだろうか。

パフォーマー  
のつぶやき

お題  
「脳」

## 足脳男のつぶやき

小泉ゆうすけ

僕は両上肢欠損、つまり両腕が欠けている障害者なのだが、物心ついた頃には、誰に教わるでもなく足指でペンを持ち、絵を描いていた。雑踏を歩く時も全く意識せず、足が勝手に人を避けてくれた。つまづいた時も反対の足が必ず前へ出て、とどまらせてくれる。

これらは、自分の「頭脳」からの指令というより、足自体が考えていると思われるものだった。まるで、足の脳があるような感じだ。表現をやっている時も基本的には同じだ。ある意味、足の導きで最適な動きをしてくれる。

しかし、その「足脳」の考え方は余りにも健常者の、任せ切りにしてしまうと、スルスルと、効率的に動いてしまう。これは、態度で大多数を占める「脳性まひ」のパフォーマーと比べると、かなり異質で「頭脳」と「足脳」に強く縛られた身体だと言える。

なので健常者の足の動きを意図的に制限してみる。

すると胴体や肩や腕が、脳のコントロールから外れ勝手に動き出す。それにつれて、足まで規律的な動きから外れだす。

ある意味、健常者以上に「脳」のコントロールが強い自分の身体で、態度の身体表現ならではと言える「脳」のコントロールを逸脱した身体の動きをどう出せるか。日々、葛藤し、模索している。

国際芸術祭「あいち2025」では、観客の皆さんに楽しんでいただけるよう、とことん追求してまいりますので、ご期待ください。

## 私の脳存在の大切さ

山崎ゆき

私の脳は不思議な育ち方をしています。私の脳性まひに由来する不随意運動と言語障害のコントロールは、とても難しいです。それに加えて緊張も強いのです。

私は、子どもの頃、あまり私自身で判断することが出来ない状態でした。なぜかと言うと、家族が私との付き合い方が分かりづらかった為、私の存在「本当のところの私の感情」を否定されていたからです。

小学校三年くらいから中学二年生の夏前まで、たまに私がパニックになると身体が暴れ興奮がきつくなっている時は、相手を責める言葉を使っていることが多くなりました。

その時の私は、知らないうちに私自身から逃げていたのかもしれない。

時代ごとに、色んな人と出会いました。そのことでたくさん経験と勉強をさせてもらいました。

なかには私を理解してくれる人と、否定される人がいます。

否定されると、私はやるせなくなってしまう。

言語障害がきつく、必要なことを人に伝えたい時、大声になってしまいます。

それが、周囲の人には怒鳴っていると勘違いされることが多いです。

五年前、障害のある自分の身体で表現したいと思い、態度に入りました。

今年、国際芸術祭「あいち2025」で、私の持ち味であるダイナミックな身体の演技を發揮したいと思っています。

ぜひ、観に来てください。

## ワタシは言葉をもたない

向井望

ワタシは言葉をもたない。なのに、金さんの演出はわかる。言葉を越えたテレパシーか？

ワタシの脳内はどうなっているのか？

AIなどには解明できまい。言葉はないけど、映像量はすごいよ。おいしいものを食べて、安心して眠りたい。不快なものやワタシを侵しそうなものは断固拒否！「私はワタシ」と胸をはって生き、いろんな人と出会いながら、やりたいことをやっていきたい。その一つが、6歳の時から今日までの「態度」の舞台だ。

## 脳性麻痺について

池田勇人

今回の作品タイトルは、「BRAIN」＝脳。僕達の障がいは「脳性麻痺」。治らない障がいをもとに日々の社会生活をおくっている。「脳性麻痺」の緊張やヨダレは、一生懸命がんばればがんばるほど出てしまう。それが「障がい特性」だが、障がいのまじがったとらえられかたによって差別や偏見を受ける事も多い。「脳性麻痺」、表記からすると「脳に障がいがある」と思われることも今でもしばしばある。言語障がいをもつわれわれは、自分の言語が伝わらないことの怒り、寂しさ、悔しさがある。われら「脳性麻痺」が「AIロボット」を使えるのか？無理である。

ロボットが本気で、人を使う時代は、絶対来ない、人間は、高貴な、生き物である、そう信じて、舞台上がりたい。



## 7.26 施設障害者虐殺 9年目の追悼アクション

2016年7月26日未明に神奈川県相模原市の障害者収容施設に一人の男が押し入り45名を刺し、19名が亡くなりました。この事件から9年が経ちます。

実行犯は、その人たちが障害者であるという理由だけで、その命と尊厳を否定し殺害におよびました。これはヘイトクライム(\*1)です。また、ある人たちを〈生きる価値のない人間〉とみなす優生思想もこの事件の背景として見逃せません。

そして、今なお殺された19人のうちの多くが名前を明かされないままです。これは、山奥の施設に障害者を収容し社会から視えない存在とすることと共通の構造だと言え、障害者差別の根深さを物語ります。

\*\*\*\*\*

事件から9年経つ今、障害者だけでなく、あらゆる人の命がますます軽く扱われるようになってきていると感じます。

ウクライナ侵攻、ガザでのジェノサイド、おびただしい数の人々が連日殺され続けているのに、戦争を直ちに止めようとするのでなく利権や駆け引きの材料にしている。日本でも災害復興や食糧・医療の危機に冷淡で軍事予算増大と戦争準備ばかりの政治を反映してか、世間では人の命と尊厳を軽んじるような事件が多発し、差別排外の煽動・偏見を助長するデマ拡散がなされています。差別がはびこり人間の尊厳と人命が軽んぜられることと歩みを合わせて戦争がしのびよって来るのだと思います。

\*\*\*\*\*

7月26日は障害者の尊厳と命が徹底的に踏みにじられた日です。この事を社会がきっちりと受け止めないならば、この加害は一人の虐殺犯人の仕業というよりも、社会全体が障害者の(ひいては人間全体の)尊厳と命を踏みにじったことになると思います。障害者を起点に、すべての人の命を決して軽く扱わない、その決意を確認し合う日が7月26日だと位置付けます。

私たちは7月26日を「祈念日」とし、亡くなった19名の命を追悼するとともに、犯行を決して許さず、事件を忘れないために声をあげ続けます。

誰の命も大切にし人権を守る社会を求めて連帯するために、一緒に声をあげましょう。

\*1 ヘイトクライム  
人種、宗教、肌の色、民族、障害、性的指向、性別などを理由とした憎悪や偏見を動機とする犯罪

**日時：2025年7月26日(土) 18:30 アクションスタート**  
**場所：ヨドバシカメラ梅田周辺**

**18:30～** スタンディングとスピーチによるアピール <スピーチには手話通訳があります。>  
**19:50～** スタンディングエリア付近を移動。その後、うめきた広場周辺で解散

- ・ヨドバシカメラ梅田周辺で各自広がりスタンディングを行ってください。
- ・献花台を用意しますので、よろしければお花をご持参ください。
- ・プラカードや黒リボンを用意していますが、ぜひご自身の言葉をプラカードにしてご持参ください。
- ・猛暑や急な雨が予想されます。水分補給や雨具の用意をお願いします。
- ・7月26日やその前後にX(旧Twitter)等でハッシュタグ #PrayForSagamihara や #726 追悼 を付けて思いを発信してアクションにご参加ください。

主催 7.26 追悼アクション有志 E-mail : prayforsagamihara726@gmail.com

## 速報！ 相模原障害者殺傷事件 9年目にしてようやく国会質疑が！

2016年7月26日、神奈川県相模原市の「津久井やまゆり園」において19名もの障害者が命を奪われたあの事件から9年を迎えようとし社会の中で風化が懸念される中、ようやくにして、国会質疑の中でこの事件のことが扱われました。直接口頭による質疑応答ではなく質問趣意書が提出され首相答弁書が返ってきたという形ではありましたが、大事な一歩としてここに報告します。

日本政府のこの事件に対する態度としては、事件直後に当時の安倍首相が表明した「再発防止」があらうことか精神障害者への監視・管理強化という言葉道断のすり替えと差別の拡大再生産だったことが特記されます。

2020年3月16日の横浜地方裁判所の判決は、この犯行が精神障害によるものではないと明確に判定し、優生思想及び障害者に対する偏見差別による犯行であったことを示しました。しかし日本政府のこの事件へのスタンスは是正されないまま事件から8年が経過しました。

2024年7月3日の旧優生保護法国家賠償請求訴訟の最高裁判決を踏まえ、当時の岸田首相が当事者らと面会し謝罪を行ない、その中で「二度と同じ過ちを繰り返さないための検証に加えて、優生思想及び障害者に対する偏見差別の根絶に向けた恒久的な対策が不可欠だ」と述べています。これを踏まえたかたちで、2024年10月に大石あきこ衆議院議員（れいわ新選組）が「優生思想及び障害者に対する偏見差別の根絶と相模原事件（津久井やまゆり園で十九名の命を奪った差別犯罪）の検証に関する質問主意書」を提出しました。ちょうど首相交代があり11月11日に同じ質問趣意書を再提出して、11月22日に石破茂首相の名前で答弁書が返ってきました。

大石議員の質問の要点は、①「二度と同じ過ちを繰り返さないための検証」について、政府の政策の社会への影響もちゃんと検証しているか？ ②相模原事件もその検証に含めるべきではないか？ ③横浜地裁判決後に政府は相模原事件の検証をおこなったか？ ④一方的に人の存在を「不幸」「不要な存在」とし「重度障害者に使われていた金を他に使い」という犯行動機は、政府の施策によって振りまかれ社会に根付いた優生思想として対象化すべきだと考えるが、政府としての見解は？ ⑤障害者支援施設内での虐待・暴力の実態があり、それが犯人の考え方に影響したことも踏まえ、政府として障害者支援施設の在り方についてどのような検証をしたか？ ⑥総理大臣自らが、犯行動機である優生思想及び障害者に対する偏見差別を明確に非難することが重要である。許さないと明確に表明すべきではないか？

これに対する総理大臣名での返答は、端的に言えば、関係機関が検証をやっているので政府として改めてやるつもりはない、というものでしたし、④について「障害者への一方的かつ身勝手な偏見や差別意識」が犯行動機の背景になっていたという個人的な問題に切り縮めて政府の政策の影響については全くスルーでした。このように基本姿勢として不誠実な返答ではありましたが、最後に、「御指摘の『優生思想及び障害者に対する偏見差別』が許されないことは明らかであり」という文言が入っていたことだけは評価しておきたい。優生思想は許されないと総理大臣が明言したことに、ひとまずは安堵します。

命の価値に差をつけない社会の実現に向けて、政府にはしっかりと責任を履行させ、すべての市民は誤った考えを克服し人間尊重の意識を高めていかねばならないと考えます。

### 昨年開催の「7.26 施設障害者虐殺8年目の追悼アクション」 記録動画を公開中

参加者によるスピーチと梅田行進、ダイ・インの様子が収められています。

映画監督の戸田ひかるさんと、小田香さんに作っていただきました。ぜひご覧ください。

<https://youtu.be/wDp2ZK6OSVc>

#PrayForSagamihara



# 異文化の交差点・イマージュを是非ともご購入ください!

「イマージュ」は年3回発行を続けてきて気づけば30年。  
 態変の活動をひとつのコアに、ちょっと他にはない異文化のクロスオーバーを発信してきました。  
 各号1冊500円 年間購読(3号分)1500円  
 同封の郵便振込でお申し込みください。

## vol.90 2024年冬号

### クロスオーバー談義●華雪×金満里 書の宇宙、身体宇宙 女芸術家はたおやかな闘志で

意味の伝達や記録の手段である文字を、表現として作品に定着させる「書」という芸術分野は、観客の前でリアルタイムに身体の動きを意味を剥がして表現に仕立て上げてきた態変とは、非常に対極的であると思われました。「異文化の交差点」を標榜する本誌としては、ぜひともやってみたいクロスオーバーでしたが、2022年に金満里のソロ公演にてコラボレーションをさせていただいた書家の華雪さんと対話の機会をもつことができました。

対談の前半では、芸術の途を志した女性がたどってきた理不尽で壮絶な闘いの軌跡(いったい、どの時代の話や!)、そこでのただならぬ母娘関係のことなど、個人の体験を超えて普遍的な意味をもつお話が聞けました。後半は、書という芸術の奥深い特性や、漢字に関する、興味の尽きないお話になりました。

- コスタリカ訪問記 …………… 内田陽子
- 13年ぶりのトルコ訪問記 …… 岩城あすか



## vol.91 2025年春号

### クロスオーバー談義●上野千鶴子×金満里 空前の身体表現の軌跡、自立概念の根本的転換

金満里『生きることはじまり』新装復刻版の刊行記念イベントとしておこなわれたトーク。上野千鶴子さんの絶妙なリードにより本の内容に沿って始められたトークは、当然ながら社会へ向けたラジカルな投げかけへと展開していきました。

人間の暗い面を見る／排除に抗って／母の凄み／自立概念の大転換／表現者になる／「障害者でもやれる」ではなく／お前は何者なんや／アーティストとしての軌跡／「助けて」を言おう／生きていくことが何よりも大事

- クルドとクルド人を知るための一問一答 ……ワッカス・チョーラク 聞き手: 岩城あすか
- フェイクニュースとデマに我らの世界を壊させぬためには? ……仙城真
- 八重山の神さまにお詫びする旅 ……………金満里

- 大野慶人の言葉 …………… 大野圭子
- 【連載】ことばとからだ …………… 西成彦
- 人倫の奈落・ガザをめぐる往復書簡 ……金満里×岡真理



## vol.92 2025年夏号

### 現在編集中、2025年8月末までには刊行予定

クロスオーバー談義●時里充×金満里 (仮題) AIと芸術 ——身体、脳、言語、AI

- 相模原施設障害者大虐殺事件に関する国会質疑・詳報
- 共生・共働の実験場・わっばの会訪問記

# 2025年度賛助会員募集 !!

## みなさん、賛助会員になってください!

このダイレクトメールを読んでもうくださってありがとうございます。御座います。  
態変の創り出すアートシーンに、ご注目と共鳴をいただきましたらとても幸いです。

その態変活動は、  
一階稽古場と二階事務室と多目的室の一つの場があって、生み出されています。

世界に類を見ない 態変  
身障者自身が、最も重度の身障の身体を表現として芸術に昇華させる、  
という視点で既存のダンスや身体表現とは全く違った発想の元、  
独自の着眼で身体表現の方法を編み出し、  
探求しつづけ 40年間にも及ぶ芸術活動を継続させて来ました。  
それは最前衛で追求して来たからこそその結果です。

私たちは、最重度の身障者だからこそ創り出せる芸術、  
ということをも < 障碍 > の枠に括らず、普遍的芸術の中でこそ態変芸術を打ち出し、  
普遍的芸術自体の領域をこじ開け広げないといけないと考えています。  
しかしこの < 場 > があって創り出せる態変芸術が、  
私たち身障者だけの単独で全てを自足させるには力及ばずです。  
そのところに対し、一般市民のみなさんへ、  
この態変芸術をもっと育て伸ばしていく、市民パワーとして、  
態変賛助会員になっていただきたく存じます。

### 態変賛助会員制度 (2025年度) 会員募集

- 年会費● 個人会員 …… 一口 5,000円  
法人会員 …… 一口 20,000円

- 入会方法● (郵便振替) 同封の振替用紙にご記入の上、お振込み下さい。

口座番号 **00920-8-320343** 加入者名 **イマージュ劇団態変**

(PayPal) メールアドレスとクレジットカードをお持ちの方はホームページよりご利用頂けます。  
態変 HP → 日本語 TOP 「賛助会員制度」にお入りください。



#### 会員特典

- ・会員証発行
- ・態変公演ダイジェスト映像 DVD 進呈 (年1回)
- ・態変公演チケット 500円引き

国際芸術祭「あいち 2025」招聘公演

# 態変 『BRAIN (ブレイン)』

公演日程 9月

26 (金) 18:30 ★  
27 (土) 18:30 ♡  
28 (日) 14:00 ♣♡

★ ミート・ザ・アーティスト：終演後、アーティストとの対話の時間があります。  
♣ リラックス・パフォーマンス公演  
♡ 託児サービスあり

一般前売 ¥3500 U25 前売 ¥2000 ペアチケット ¥6500  
当日券 前売+ ¥500

セット券

全演目チケット 一般 ¥24,000 U25 ¥14,000  
3演目チケット 一般 ¥9,900 U25 ¥5,400

※ U25 チケットは公演日に 25 歳以下の方が対象です。当日身分証をご提示ください。  
※ 障害のある方の同伴介助者は 1 名まで無料です。当日障害者手帳をご提示ください。  
※ 車いす席のご予約はアイ・チケットまでご連絡ください。  
※ 未就学児入場可能な公演では、未就学児は同伴者の膝の上での鑑賞は無料。  
座席を確保の場合は有料です。  
※ 当日券情報は後日公式サイトでお知らせします。  
※ 公演内容、出演者は予告なく変更となる場合があります。

取り扱い窓口

◎ネットでチケットを入手するには、右の QR コードから  
辿って下さい。



▶ 愛知芸術文化センタープレイガイド  
愛知県名古屋市東区東桜 1-13-2 地下 2 階  
TEL: 052-972-0430  
(平日 10:00-19:00 土・日・祝 10:00-18:00  
月曜定休 (月が祝日の場合は翌日) )

▶ Artsticker  
<https://artsticker.app/events/76035>

▶ アイ・チケット  
<https://clanago.com/i-ticket> TEL: 0570-00-5310

▶ チケットぴあ  
<https://t.pia.jp/>

◎公演に関する問い合わせ：  
国際芸術祭「あいち」組織委員会  
Email: [triennale@pref.aichi.lg.jp](mailto:triennale@pref.aichi.lg.jp)  
TEL: 052-971-3111  
(9:00-17:30 / 土日祝休み / 会期中は無休)

◎チケットに関する問合せ：  
クラシック名古屋  
TEL: 052-678-5310 (10:00-16:00 / 土日祝休み)

会場

愛知県芸術劇場 小ホール (B1F)

Aichi Prefectural Art Theater  
名古屋市東区東桜 1-13-2

会場アクセス Access

- 地下鉄 東山線または名城線「栄」駅下車、徒歩 3 分  
- 名鉄瀬戸線「栄町」駅下車、徒歩 2 分  
(オアシス 21 から地下連絡通路または 2F 連絡橋経由)



愛知芸術文化センターの地下1階  
愛知県芸術劇場小ホール

鑑賞サポート

▶ 車いす席  
車いす席のご予約はアイ・チケットまでご連絡ください。  
TEL: 0570-00-5310

▶ 託児サービス  
♡マークの公演では託児サービス (有料) を実施します。  
原則事前申し込みが必要です。

▶ リラックス・パフォーマンス公演  
♣マークの公演では、鑑賞マナーを少しだけゆるくする「リラックス・パフォーマンス」を実施します。声を出してしまったり、途中入退場等も OK。お子様連れのご家族や、障害のある方などなかなか劇場に足を運びづらいと感じている方にも作品を楽しんでいただける回です。

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会  
共催：愛知県芸術劇場

表紙イラスト / OKA  
編集人 (返送先) : イマージュ 金満里 小泉ゆうすけ 仙城真 レイアウト / 和田佳子

〒533-0031 大阪市東淀川区西淡路 1-15-15  
tel/fax 06-6320-0344 e-mail [taihen.japan@gmail.com](mailto:taihen.japan@gmail.com) 定価 50 円  
発行人：関西障害者定期刊行物協会 / 大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4F

1991年9月3日 第三種郵便物承認

毎月(1・2・3・5・6・8の日)発行